

里の力で学校は残った

—小中一貫教育校 京都大原学院の挑戦—

京都大原学院 初代校長 宮崎裕子・著

保護者、地域住民、教職員の協働での子育てだけでなく、
この学校には学年を超えた子ども同士の学び合い、
育ち合いがあります。
自然と人間が共生する里で、本物の学習と教育があります。
この本にはその素晴らしい「なぞ」を知るヒントがいっぱい。

小松郁夫（国立教育政策研究所名誉所員）

主な目次

刊行によせて

- 京都市教育委員会教育長 在田正秀
- 国立教育政策研究所名誉所員 小松郁夫
- 奈良教育大学教授 小柳和喜雄

第1章 学校がなくなる！

- 1 三度目の大原へ！／ 2 いざ校長として、学校をどうする！？
- 3 誰のための学校？ 誰が学校を作る？／ 4 どうしたら学校を残せる？

第2章 大原の里とは……

- 1 大原の歴史／ 2 学校への思い

第3章 新しい学校づくりへ

- 1 学校存続が決定！／ 2 学校づくりが始まる／ 3 小中一貫教育校を生かした教育課程／ 4 小規模であるということは

第4章 学校がスタートすると

- 1 さあ開校だ！ みんなで学校を作る／ 2 見られて育つ、見て育つ／
- 3 廊下一本で小中が結ばれる？／ 4 いつしか0歳から15歳の学びの空間／
- 5 学校が地域に残ったことで

第5章 小中一貫教育校とは

- 1 全国の状況／ 2 京都方式と京都大原学院／
- 3 子どもたちと地域の輝く未来に向けて

第6章 京都大原学院の今

- 1 10年の歳月が流れると／ 2 子どもたちの学力は？ 生活力はどうか変化／
- 3 九年間の集大成としての子どもの「大原提言」／ 4 地域の思い／
- 5 現在の大原学院の取り組み／ 6 大原の里、今

◆資料編

京都郊外、三千院などの歴史と風光明媚な山里として知られる大原の里、この地の市立中学校に4年ぶりに校長として赴任した著者が見たものは、少子化による学校の統廃合問題に揺れる地域の姿だった——
地域の思いをくみ取り、地域の力で小中一貫校を作ることを決意した著者は、ときに壁にぶつかりながらも地域に寄り添い、平成21年に京都大原学院の開設にこぎ着ける。
開設までの苦闘、開設後の具体的な教育や日常に起こる問題、そしてそれをどう乗り越えたのか、さらには現場教員や地域・保護者・子どもたちの声などによる、開設10年を経た現在の姿までを、臨場感あふれる筆致と資料で詳細に描くドキュメント。



8歳違いがむつまじく

注文方法…A、Bどちらかをお選びください

定価 1,944 円（税込）

発行 リトルズ
発売 小さ子社

定価：1,944円（税込、本体1800円）
A5判・並製本・336ページ
ISBN:9784909782502

(A) 全国の書店、ネット書店にご注文下さい

(B) インターネットの小さ子社ウェブショップからもご注文いただけます
（スマホ可、クレジットカードまたはコンビニ後払い）

<https://chiisago.shop-pro.jp/>

※別途送料をいただきます

ご注文冊数	1～2冊	3～4冊	5冊以上
送料（税込）	300円	600円	1000円

※学校の校費ご購入で先払い・カード払いが難しい場合は発売元にお問い合わせ下さい

小さ子社ウェブショップへのリンク



3 小中一貫教育校を生かした教育課程

① これぞ、めだまづくり

学校を残すためには特色づくりが不可欠であった。「どこの学校にもないような特色を考える」これが、山口校長と私のとてつもなく大きな宿題であった。

「学校のめだま」と称しておびただしい時間をかけて相談し、小中両教頭、小中両教務主任を合わせた三役会でも何度となく相談をした。その結果次のようなものができあがった。今の大原学院の教育の骨子になっている。

掲載資料は平成20年開設1年前の折のそのまものものであるが、ありがたいことに基本はかなり継続的に踏襲されている。大きな柱は次のようである。

② 学力向上面

【教育課程内】

○小1からの英語活動

深まる国際化の中で英語の必要性が語られる中で、幼児期に耳から入ることとしての基礎を養い、



ALTと学習

学習として学ぶ中1で英語嫌いにならぬよう、自然体での英語の学びの環境を作ろうとした。しかし、今でこそ、小学校からの英語が当たり前になってきているが、当時で言うところ、小学校1年生からの英語は、かなり大胆な企画であった。これは、私たちは、大きなめだまであるという認識だった。自治連会長も兼ねてから、英語教育を強調していた。私自身も私的なことで恐縮だが、自分の娘たちにも幼少の頃から、自然な英語環境を作ろうとしていた。近所にいた留学生や、知り合いになったALTを事あるごとに家に招き、娘たちと一緒に遊んでもらったりした。そうしたことが役に立ったという認識はあったので、ぜひ進めたいプランだった。

学校でも、学習というよりは、ネイティブの方と子どもたちが自然に英語でふれあえる環境を作りたいと思った。具体的には帯活動として毎日10分間の英語活動で、中学校英語教師またはネイティブのALTが中心になり、学級担任がサブでついてT活動として行っている。ALTは教育委員会からの方だけでなく地元からの支援があり、留学生のALTの方に別途来ていただいた。小3から小6までは中学校英語教師と学級担任によるT指導による英語活動として週一時間確保し、時にはALTによる指導も含めて、英語活動の時間の充実を図ろうとした。

先日新聞に、経団連による企業アンケートで大学卒の新規採用で「選考に重視した点」のトップは、2017年まで15年連続で「コミュニケーション力」という記事が載っていた。「主体性」「チャレンジ精神」「協調性」より重視されているとのことだった。(略)

近年学校でも随分言われてきた力だが、私がこれを取り上げた理由は、大原の子どもたちは、小規模で9年間同じメンバーで来るため内輪のコミュニケーションでなりたつてしまい、小さい時から知りすぎていて、きちんとした言葉でのコミュニケーションが不要である。○学校に見知らぬ人がいないので、初対面の人や大勢の人の前で、緊張してしまう。○大人もこの傾向がある。ということから、本来に基礎的なコミュニケーション力をつけさせたいという思いから始まった。

(第3章 2 (2) ② めざす子ども像より)

地域・保護者・教職員・子どもたち総がかりで、万感の思いで開設式を迎えた。当日は念願の京都市長も多忙な公務を割いてかけつけて下さり、温かい祝辞をいただいた。一人一人の挨拶の言葉にもそれぞれの思いがこもっていた。子どもたちの言葉も胸に響いた。そして、全校合唱はピカピカの真新しい標準服に身をつつみ、前期の子どもたちのお揃いのトレーナーも含めて、お披露目となった。アトラクションの「京炎そでふれ」も花を添えた。お母さんたちの手作り衣装であるという感激がしみじみ伝わってきた。なんといっても子どもたちの顔が輝き、自信に満ち溢れていたのがうれしかった。

(第4章 1 さあ開校だ！ みんなで学校をつくるより)

ある教員が「隣り合っていた小学校と中学校の間にあった垣根は、一晚のうちに消えてなくなった。小中一貫ってこんなに簡単にできるんだと思っていたら、心の問題の方がよっぽど大変でした」と当時を振り返った。小学校と中学校の垣根が一晚のうちに取り払われ、代わりに雨露をしのぐ以上の、壁面に絵画さえ飾れる立派な廊下と、ゆったりとした職員室と、今までの小学校・中学校のもののよりりっぱな玄関を作っていた。子どもたちは、この廊下を「虹のかけ橋」とネーミングしてくれた。後は中身のみ充実と考えたが、そう簡単なことではなかった。

小学校と中学校の違いというのは一口で語ることでできるほど簡単なテーマではない。

(第4章 2 見られて育つ、見て育つより)